

—原著—

長野赤十字病院口腔外科開設後20年間の 外来患者の臨床統計的観察

櫻井 健人, 横林 敏夫, 清水 武, 五島 秀樹,
鈴木 理絵, 大久保 雅基, 長田 美香

長野赤十字病院口腔外科
(主任: 横林敏夫)

Clinico-statistical Observation on Out-patients during the past 20 years at
Department of Oral and Maxillofacial surgery, Nagano Red Cross Hospital

Taketo SAKURAI, Toshio YOKOBAYASHI, Takeshi SHIMIZU,
Hideki GOTO, Rie SUZUKI, Masaki OKUBO, Mika OSADA

Department of Oral and Maxillofacial Surgery in Nagano Red Cross hospital
(Director: Toshio Yokobayashi)

平成16年10月28日受付 12月9日受理

Key words: clinico-statistical observation (臨床統計的観察), Outpatients (外来患者), Oral and Maxillofacial Surgery (口腔外科)

Abstract: We performed clinical statistical observations on patients for twenty years, from October 1983 to September 2003, at the Department of Oral and Maxillofacial Surgery of the Nagano Red Cross hospital. Some of the results obtained are listed below.

1. The total number of patients was 64421 consisting of 28527 males (44.3%) and 35894 females (55.7%); a male to female ratio of 1:1.3. Patients in their 20s accounted for the most visits 21.2%, followed by those in their thirties and then those in their fifties.
2. Patients living in Nagano city accounted for 68.0 % of the total number of patients.
3. As for referrals, 25694 were sent to us from other clinics, while the remaining 8077 were referred from other departments within the hospital.
4. In terms of disease classification, 10.9% of the patients visited due to craniofacial deformities; 6.6% due to traumatic injury; 32.1% due to inflammation; 7.4% for oral mucosa disease; 6.0% due to cystic lesions, 1.9% for tumors; 2.0% for tumor-like lesions; 12.3% for temporomandibular joint disorder; 1.4% due to salivary gland disease, 1.9% for neurological disease, 0.2% for blood disease; and 4.6% for general dental disorder.

抄録: 今回、わたくし達は長野赤十字病院口腔外科の開設した1983年10月から2003年9月までの20年間の外来患者について臨床統計的観察を行い、以下の結果を得た。

1. 対象期間中の新患患者総数は64421名であり、性別は男性28527名(44.3%)、女性35894名(55.7%)でありその比は1:1.3であった。年齢別では20歳代がもっとも多く13674名(21.2%)であった。
2. 新患患者の居住地域は、当科の位置する長野市が43810名(68.0%)、次いで隣接する上水内郡5157名、須坂市2990名、更埴市2585名の順であった。
3. 紹介医療機関は院外紹介が25694名、院内紹介が8077名であり、院内外からの紹介患者の合計は33771名で紹介率は52.4%であった。また院外紹介患者の内訳は、歯科・口腔外科からの紹介が20989名(81.7%)、矯正歯科1512名(5.9%)、歯科・口腔外科、矯正歯科以外の医療機関からの紹介は3193名(12.4%)で内科、耳鼻科、外科、整形外

科, 小児科の順であった。

4. 疾患別では, 発育異常・奇形・変形10.9%, 外傷6.6%, 炎症性疾患32.1%, 粘膜疾患7.4%, 嚢胞性疾患6.0%, 腫瘍性疾患1.9%, 腫瘍類似疾患2.0%, 顎関節疾患12.3%, 唾液腺疾患1.4%, 神経性疾患1.9%, 血液疾患0.2%, 一般歯科疾患4.6%であった。

緒 言

長野赤十字病院口腔外科は新病院への移転を機に長野県北信地域唯一の口腔外科専門医療機関として1983年10月に開設され, 2003年10月で開設満20年を迎えた。当科開設の際, 地元歯科医師会との役割分担を明確にし, いわゆる一般歯科疾患は重度心身障害者のみとし, 職員はもとより入院患者についても原則行わないこととし, 院内標榜は「口腔外科」を一貫し「病診連携」を率先してきた。

今回, 当科開設後20年間の臨床の実態を振り返り, 地域医療の実態を把握するため, 外来における新患患者について臨床統計的観察を行ったので報告する。

対象および方法

長野赤十字病院口腔外科の開設した1983年10月から2003年9月までの20年間に当科外来を受診した新患患者64421名である。新患患者については, 初診時の主訴につながる診断により一患者一疾患としたが, 年が変わり別の新たな主要疾患のため受診した場合は新たに新患患者として扱った。これらについて年次別, 月別新患患者数, 性別および年齢, 新患患者の居住地, 紹介医療機関, 疾患内容のそれぞれにつき臨床統計的観察を行った。

結 果

1. 年次別新患患者数

新患患者の年次別推移は, 開設3年目の1985年には新患患者数が2000名, 1990年には3000名を越え, 1998年, 1999年の2年間は3900名を越えた。その後の最近3年間はやや減少したものの3600名前後で大きな変化は認めなかった。(図1)

2. 月別新患患者数

月別新患患者数は, 3月が最も多く6063名(月平均303名), 以下多い順に7月5743名(月平均287名), 8月5709名(月平均285名), 6月5655名(月平均283名)であった。また, 最も少ない月は12月の4705名(月平均235名)であった。(図2)

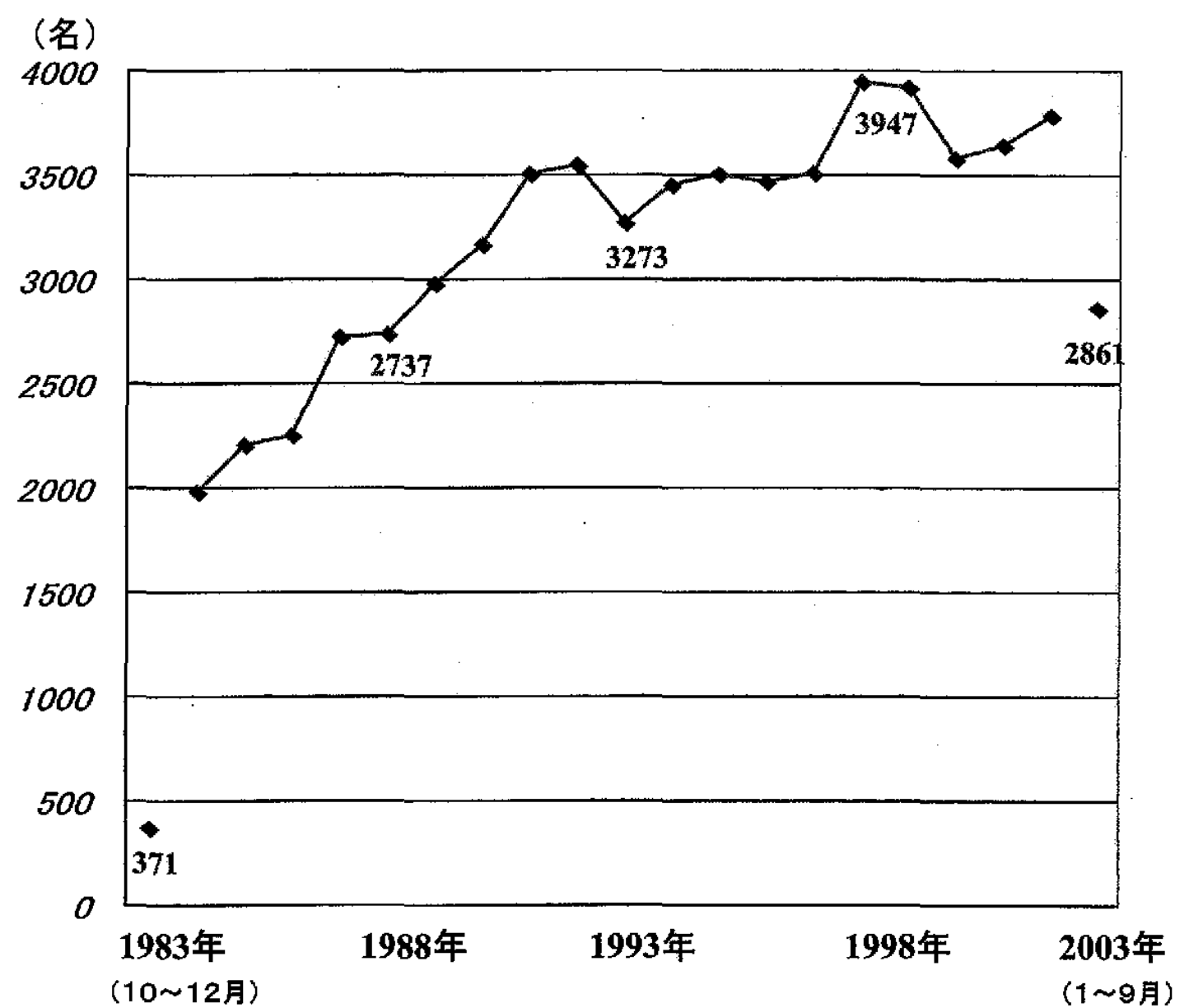


図1 外来新患患者の年次別推移

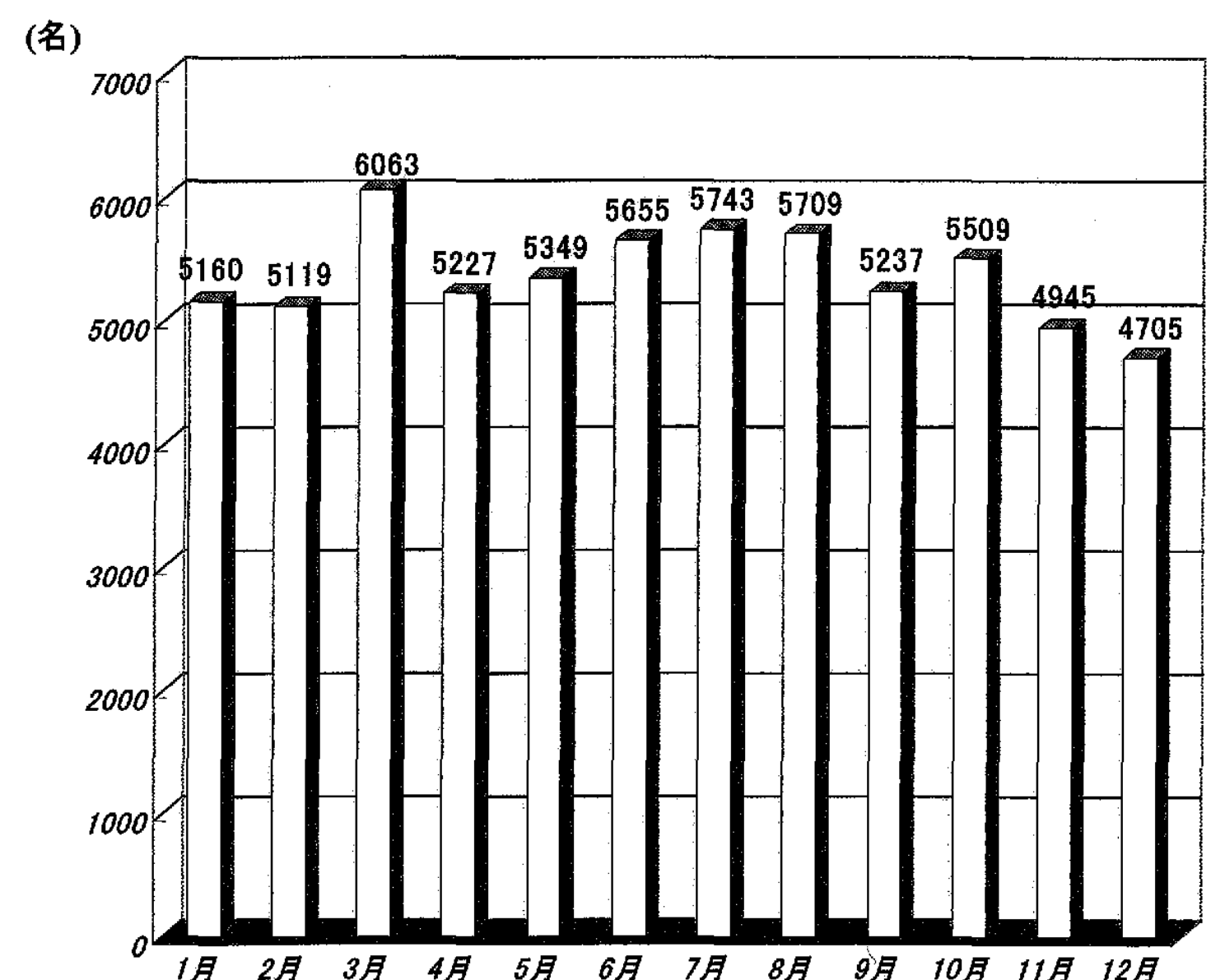


図2 月別新患患者数

3. 年齢, 性別新患患者数

性別については, 男性28527名(44.3%), 女性35894名(55.7%)でその比は1:1.3であった。年齢別にみると, 20歳代が13674名(21.2%), 30歳代9685名(15.0%), 50歳代7939名(12.3%)の順であった。高齢になるに従い患者数は少ない傾向であった。(図3)

4. 居住地別新患患者数

新患患者の居住地は当科の位置する長野市が43810名(68.0%)と圧倒的に多く, 以下隣接する上水内郡5157名(8.0%), 須坂市2990名(4.6%), 更埴市2585名(4.0%)の順であった。

(名)

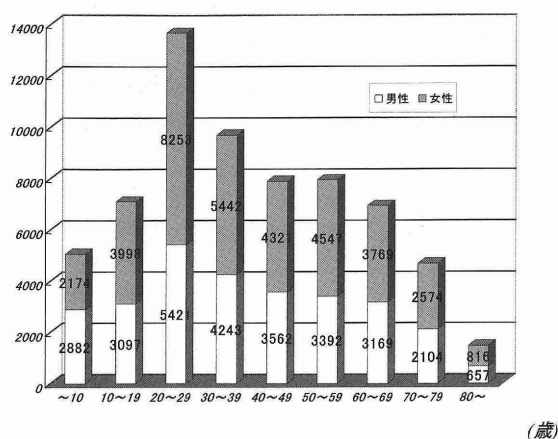


図3 性別および年齢別患者数

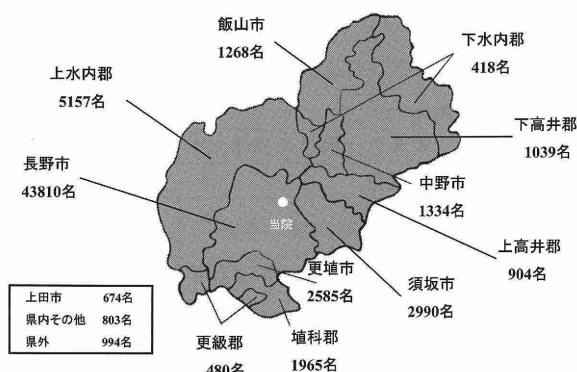


図4 新患者の居住地分布

5. 紹介医療機関別新患者数

他医療機関及び当院他診療科より文書にて紹介され、当科を受診した紹介患者数については、院外紹介患者は25694名で紹介率39.9%、院内紹介患者は8077名で紹介率12.5%であり、院外および院内紹介患者の合計は33771名で、両者をあわせた紹介率は52.4%であった。

紹介患者数の推移をみると、院外紹介患者数は当科開設時より徐々に増加し、1995年より2年間は一時減少したが、その後は徐々に増加傾向を示し最近2年間は著しく増加しており、2002年には1884名であった。院内からの紹介を合わせた紹介患者は2333名で紹介率も60%を超えた。(図5)

院外紹介医療機関の内訳をみると、最も多かったのは歯科・口腔外科からの紹介20989名で全体の81.7%を占めていた。そのうち、歯科開業医からの紹介は20727名(98.8%)で病院歯科(口腔外科)からの紹介は262名(1.2%)であった。歯科・口腔外科に次いで矯正歯科151名(5.9%)の順であった。また歯科・口腔外科、矯

正歯科以外の医療機関からの紹介患者は3193名で院外紹介患者全体の12.4%であり、診療科別では内科からの紹介が最も多く、ついで耳鼻科、外科、整形外科、小児科の順であった。(図6)

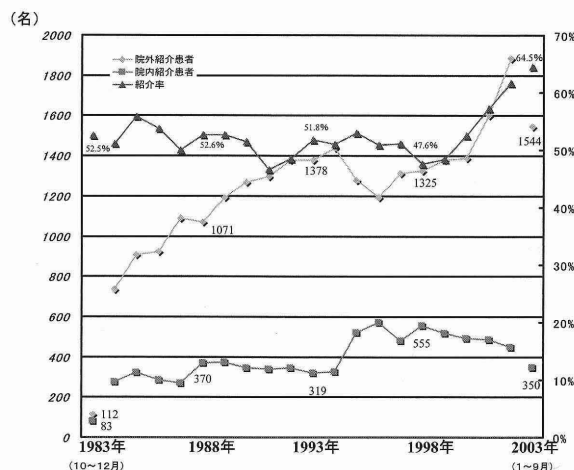


図5 院内および院外医療機関からの紹介患者数および紹介率

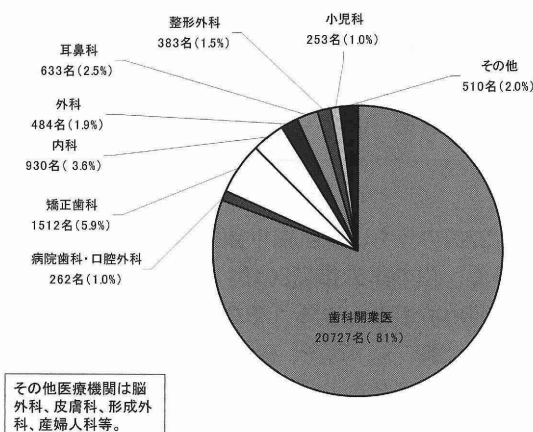


図6 院外紹介医療機関の内訳

6. 疾患別新患者数

疾患別に分類してみると、炎症性疾患が20652例と最も多く32.1% (年平均1033例)、顎関節疾患が7895例12.3% (年平均395例)、発育異常・奇形・変形が6995例10.9% (年平均350例)、粘膜疾患4795例7.4% (年平均240例) 外傷4227例6.6% (年平均211例) であった。嚢胞性疾患3862例 (6.0%)、腫瘍性疾患1253例 (1.9%)、腫瘍類似疾患1308例 (2.0%)、神経性疾患1218例 (1.9%)、唾液腺疾患906例 (1.4%)、血液疾患100例 (0.2%)、歯牙う蝕(要抜歯) 2656例 (4.1%)、その他5597例 (8.7%) であった。いわゆる一般歯科疾患は2957例で全体のわず

か4.6%であった。(表1)

表1 疾患別新患患者数

A. 発育異常・奇形・変形	6995 (10.9%)
B. 外傷	4227 (6.6%)
C. 炎症	20652 (32.1%)
D. 粘膜疾患	4795 (7.4%)
E. 嚢胞性疾患	3862 (6.0%)
F. 腫瘍性疾患	1253 (1.9%)
G. 腫瘍類似疾患	1308 (2.0%)
H. 顎関節疾患	7895 (12.3%)
I. 唾液腺疾患	906 (1.4%)
J. 神経性疾患	1218 (1.9%)
K. 血液疾患	100 (0.2%)
L. 歯牙う蝕(要抜歯)	2656 (4.1%)
M. 一般歯科疾患	2957 (4.6%)
N. その他	5597 (8.7%)
合 計	64421

7. 疾患別観察

1) 発育異常・奇形・変形

発育異常・奇形・変形6995例のうち、歯の異常が5508例(78.7%)と最も多かった。なかでも歯の埋伏は4849例と最も多く、そのうち智歯は3573例と歯の埋伏の73.7%、全体でも51.1%を占めていた。以下、顎の奇形・変形634例(9.1%)、小帯の異常645例(9.2%)、顎顔面の裂奇形61例(0.9%)であった。(表2)

2) 外傷

外傷4227例のうち、軟組織単独損傷が1363例(32.2%)と最も多く、歯の単独損傷864例(20.4%)、歯と軟組織損傷の合併した症例570例(33.9%)であった。顎骨骨折は920例(21.8%)で、そのうち下顎骨体骨折が532例と最も多かった。また、その他の外傷(打撲・頬骨骨折等)は510例であった。(表3)

3) 炎症性疾患

炎症性疾患20652例のうち、智歯周囲炎が10732例で42.1%を占めており、歯周組織の炎症4687例(18.4%)、顎骨の炎症3680例(14.5%)、(歯性)上顎洞炎759例(3.0%)をはじめ、歯周組織、顎骨、顎骨周囲の炎症などいわゆる歯性感染症が20652例で81.2%を占めていた。

歯周組織の炎症の内訳は、根尖性歯周炎2987例(63.7%)、辺縁性歯周炎1394例(29.7%)、歯肉炎306例(6.5%、うちダイランチン性歯肉炎15例、アダラート性歯肉炎23例)であった。また、顎骨の炎症の内訳は、歯槽骨骨炎1596例(43.4%)、下顎骨骨炎1111例(30.2%)、上顎骨骨炎798例(21.7%)、顎骨骨髓炎175例(4.7%)であった。(表4)

4) 粘膜疾患

粘膜疾患は4795例(7.4%)であった。その内訳は、アフタを除く口内炎1351例(28.2%)、舌炎855例(17.8%)、アフタ性口内炎540例(11.9%)、扁平苔癬294例(6.1%)、白板症192例(4.0%)等であった。(表5)

表2 発育異常・奇形・変形

1. 歯の異常	
1) 萌出時期の異常	
a) 先天性歯	28
b) 乳歯晚期残存	149
c) 萌出遅延	34
2) 歯数の異常	
a) 過剰歯(萌出)	62
b) 歯牙欠如症	48
3) 歯の位置・方向の異常	302
4) 歯の埋伏	
a) 智歯	3573
b) 過剰歯	669
c) 正規歯牙	593
5) 歯の形、大きさ、構造の異常	32
6) 歯の着色・変色	18
2. 小帯の異常	
1) 舌小帯短縮症	456
2) 上唇小帯短縮症	172
3) 頬小帯異常	17
3. 舌・口唇、その他口腔軟組織の異常	32
4. 顎の奇形・変形	634
5. 顎顔面の裂奇形	
1) 唇顎口蓋裂	45
2) 口蓋裂	16
6. その他	115
合 計	6995

表3 外 傷

1. 歯の損傷	864
2. 軟組織損傷	1363
3. 歯および軟組織の損傷	570
4. 顎骨骨折	
1) 歯槽骨	193
2) 下顎骨体	532
3) 上顎骨体	140
4) 上下顎骨体	55
5. その他(打撲、頬骨骨折など)	510
合 計	4227

表 4 炎症性疾患

1. 歯周組織の炎症	
1) 歯肉炎	306
2) 根尖性歯周炎	2987
3) 辺縁性歯周炎	1394
2. 智歯周囲炎	
1) 埋伏智歯	8155
2) 萌出智歯	2577
3. 顎骨の炎症	
1) 歯槽骨炎	1596
2) 上顎骨骨炎	798
3) 下顎骨骨炎	1111
4) 顎骨骨髓炎	175
4. 顎骨周囲の炎症	
1) 頬部・オトガイ下膿瘍, 頬部蜂窩織炎	138
2) 口底炎・口底蜂窩織炎	199
3) 口蓋膿瘍	52
4) (歯性) 上顎洞炎	759
5) 外歯瘻	93
6) その他	69
5. リンパ節炎	243
合 計	20652

表 5 粘膜疾患

1) 口内炎 (アフタは除く)	1351
2) アフタ性口内炎	540
3) 口唇・口角炎	285
4) 舌炎	855
5) 地図状舌	141
6) 正中菱形舌炎	18
7) 溝状舌	74
8) 黒毛舌	36
9) 単純疱疹	51
10) 帯状疱疹	25
11) 天疱瘡・類天疱瘡	9
12) 扁平苔癬	294
13) 白板症	192
14) カンジダ症	149
15) 色素斑・メラニン沈着	71
16) 褥瘡性潰瘍	531
17) 咬傷	161
18) その他	12
合 計	4795

5) 嚢胞性疾患

嚢胞性疾患3862例のうち、顎骨に発生した嚢胞は2395例 (62.0%)、軟組織に発生した嚢胞は1467例 (38.0%)であった。

顎骨に発生した嚢胞の内訳は、歯根嚢胞 (残留嚢胞を含む) 1113例 (46.5%) が最も多く、術後性上顎嚢胞

499例 (20.8%)、含歯性嚢胞455例 (19.0%) の順であった。軟組織に発生した嚢胞の内訳は、粘液嚢胞1269例 (86.5%)、ガン腫168例 (11.5%) であった。(表6-1, 6-2)

表 6-1 嚢胞性疾患 (顎骨に発生した嚢胞)

1. 顎骨に発生した嚢胞	
1) 歯根嚢胞 (含 残留嚢胞)	1113
2) 含歯性嚢胞 (含 萌出性嚢胞)	455
3) 歯原性角化嚢胞	58
4) 非角化性原始性嚢胞	94
5) 術後性上顎嚢胞	499
6) 切歯管嚢胞	40
7) 単純性骨嚢胞	30
8) 静止性骨嚢胞	30
9) 上顎洞粘液嚢胞	44
10) 病理不明	32
合 計	2395

表 6-2 嚢胞性疾患 (軟組織に発生した嚢胞)

2. 軟組織に発生した嚢胞	
1) 粘液嚢胞	1269
2) ガン腫	168
3) 頬表皮・頬皮嚢胞	19
4) 側頸嚢胞	4
5) 甲状舌管嚢胞	4
6) 鼻歯槽嚢胞	3
合 計	1467

6) 腫瘍性疾患

腫瘍性疾患1253例のうち、顎骨に発生した良性腫瘍は169例 (13.4%) で、そのうち歯原性腫瘍141例 (83.5%)、非歯原性腫瘍28例 (16.5%) であった。歯原性腫瘍の内訳は歯牙腫83例 (58.9%)、エナメル上皮腫29例 (20.6%) セメント質腫16例 (11.3%) であった。軟組織に発生した良性腫瘍は703例 (56.1%) であった。その内訳は、線維腫251例 (35.8%)、血管腫213例 (30.3%)、乳頭腫102例 (14.5%)、多形性腺腫71例 (10.1%) の順であった。

悪性腫瘍は381例で年平均19例、そのうち癌腫は338例 (88.7%) であり腫瘍性疾患全体では2.6%であった。癌腫のなかでは舌癌が103例と最も多く、以下、下顎歯肉癌58例、頬粘膜癌31例の順であった。(表7-1, 7-2)

7) 腫瘍類似疾患

腫瘍類似疾患1308例の内訳は、外骨症 (下顎隆起、口蓋隆起、骨隆起) 495例 (37.8%)、エプーリス317例 (24.2%) の順であった。(表 8)

表7-1 腫瘍性疾患

1. 顎骨に発生した良性腫瘍	
(1) 歯源性腫瘍	
1) エナメル上皮腫	29
2) エナメル上皮線維歯牙腫	2
3) エナメル上皮線維腫	2
4) 腺様歯源性腫瘍	2
5) 石灰化歯源性嚢胞	5
6) セメント質腫	16
7) 歯源性線維腫	1
8) 歯牙腫	83
9) 粘液腫	1
(2) 非歯源性腫瘍	
1) 骨腫	22
2) 化骨性線維腫	4
3) 骨軟骨腫	1
4) 神経鞘腫	1
2. 軟組織に発生した良性腫瘍	
1) 乳頭腫	102
2) 線維腫	251
3) 血管腫	213
4) リンパ管腫	23
5) 脂肪腫	23
6) 神経鞘腫	3
7) 神経線維腫	7
8) 顆粒細胞腫	4
9) 黄色腫	5
10) 多形性腺腫	71
11) ワーチン腫瘍	1
合 計	872

表7-2 腫瘍性疾患（悪性腫瘍）

1) 口唇癌	12
2) 頬粘膜癌	31
3) 口底癌	21
4) 舌癌	103
5) 下顎歯肉癌	58
6) 上顎歯肉癌	24
7) 口蓋癌	22
8) 上顎洞癌	21
9) 中咽頭癌	17
10) 上下咽頭癌	2
11) 耳下腺癌	3
12) 顎下腺癌	3
13) 顎骨中心性癌	4
14) 顎骨転移癌	17
15) 頸部リンパ節転移	5
16) 肉腫	5
17) 悪性黒色腫	6
18) 悪性リンパ腫	25
19) 悪性エナメル上皮腫	2
合 計	381

表8 腫瘍類似疾患

1. エプーリス	317
2. 義歯性線維腫	102
3. pyogenic granuloma	46
4. 下顎隆起	240
5. 口蓋隆起	217
6. 骨隆起	38
7. 線維性骨異形成症	7
8. Hyperplasia	301
9. アミロイドーシス	5
10. 内骨腫	15
11. 歯肉線維腫症	6
12. フラビーガム	11
13. O-F lesion	3
合 計	1308

8) 顎関節疾患

顎関節疾患7895例の内訳は、顎関節症が7600例（96.2%）と大部分を占め、以下、顎関節脱臼205例（2.6%）顎関節炎38例（0.5%）等であった。（表9）

表9 顎関節疾患

1. 顎関節症	7600
2. 顎関節炎	38
3. 顎関節脱臼	205
4. 顎関節強直症	15
5. 開口障害	32
6. その他	5
合 計	7895

9) 唾液腺疾患

腫瘍性疾患を除く唾液腺疾患906例の内訳は、唾液腺炎318例（35.0%）、唾石症310例（34.2%）口腔乾燥症250例（27.5%）等であった。（表10）

表10 唾液腺疾患（腫瘍を除く）

1. 唾石症	
1) 顎下腺唾石症	298
2) 耳下腺唾石症	12
2. 唾液腺炎	
1) 顎下腺炎	121
2) 耳下腺炎	184
3) 流行性耳下腺炎	13
3. シェーグレン症候群	22
4. 口腔乾燥症	250
5. その他	6
合 計	906

10) 神経性疾患

神経性疾患1218例の内訳は、舌痛症522例（42.9%）が最も多く、次いで非定形顔面痛264例（21.7%）三叉神経痛260例（21.3%）、三叉神経麻痺118例（9.7%）等であった。（表11）

表11 神経性疾患

1. 神経痛	
1) 三叉神経痛	260
2) 非定型顔面痛	264
3) 舌咽神経痛	4
2. 神経麻痺	
1) 三叉神経麻痺	118
2) 顔面神経麻痺	42
3) 舌下神経麻痺	5
3. 顔面神経けいれん	3
4. 舌痛症	522
合 計	1218

11) 血液疾患

血液疾患は100例のうち、血小板減少性紫斑病27例（27%）、白血病24例（24%）、血友病20例（20%）、再生不良性貧血18例（18%）等であった。（表12）

表12 血液疾患

1. 白血病	24
2. 血小板減少性紫斑病	27
3. 血小板無力症	1
4. 血友病	20
5. 再生不良性貧血	18
6. その他	10
合 計	100

12) 歯牙う蝕

拔牙を要するう蝕（C4）や、智歯のう蝕は2656例で全疾患の4.1%であった。

13) 一般歯科疾患

う蝕、歯髄処置、歯周処置、歯牙破折等の保存処置が必要なものおよび修復物や補綴物の脱離・不適合等のいわゆる一般歯科疾患は、2957例でわずか4.6%であった。（表13）

表13 歯牙う蝕・一般歯科疾患

歯牙う蝕 [C4 智歯C（要拔牙）]	2656
一般歯科疾患	2957

14) その他

上記1)～13)の疾患群に分類されないその他の疾患は5597例（8.7%）であった。このうち、異常なしと診断されたものは1714例（30.6%）であり、口腔違和感1046例（18.7%）も多かった。（表14）

表14 その他

1. 異常なし	1714
2. 口腔違和感	1046
3. 拔牙後治癒不全	312
4. インプラント	205
5. 口臭症	203
6. 歯肉出血	171
7. いびき症	161
8. 術後	127
9. 口腔診査	117
10. 術後出血	93
11. 異物	83
12. 薬剤、金属アレルギー	77
13. クインケ浮腫	73
14. 血腫	69
15. 顎堤吸収症	46
16. 拔牙後骨吸収不全	42
17. 根迷入	36
18. 摂食嚥下障害	36
19. 食道・気管異物	31
20. 洞口腔瘻孔	15
21. 皮下気腫	13
22. 診断不明	310
23. その他	617
合 計	5597

考 察

今回、私たちは当科の開設した1983年10月から2003年9月までの20年間に当科外来を受診した新患患者64421名について、その実態を把握するために臨床統計的観察を行った。

開設時の外来スタッフは常勤歯科医師2名、歯科衛生士1名、看護師1名の計4名、外来ユニット3台でスタートしたが、その後患者の増加に伴いスタッフも徐々に増え1998年にはユニットも5台となり、2003年9月現在、常勤歯科医師4名、常勤歯科研修医4名、歯科衛生士3名、看護師1名、受付3名の計15名で開設時の約4倍の数となった。

新患患者数については、年々直線的に増加し、開設3年目の1985年には2000名、1990年には3000名を越え、1992年には一時減少するも1996年からの12年間は3500名以上で、新患患者についての大学病院、一般病院歯科口

腔外科の報告¹⁻⁴⁾と比較してもかなり多い新患患者数であった。新患患者が多いことは、当院の立地条件が大きな要因と考えられる。当院は、2003年9月現在、721床25診療科を有する長野県北信地域(診療圏人口約65万人)の中核医療機関で、当科開設時、当地域では唯一の口腔外科専門施設であり、その後、長野市内に「歯科口腔外科」を標榜する2病院を含め3施設に増加したが、他施設はスタッフも少なく、口腔外科専門ではないことより当科に患者が集中するものと考えられる。

性別では男性 28527名(44.3%)、女性35894名(55.7%)であり、その比は1:1.3であった。これは他施設の報告^{1-4, 5)}とほぼ同様の結果であった。また年齢別では20歳代がもっとも多く13674名(21.2%)、ついで30歳代9685名(15.0%)、50歳代7939名(12.3%)の順でこちらも他施設^{1-4, 5)}とほぼ同様であった。20歳から30歳代と比較的若年層の患者数が多い理由としては、埋伏智歯や顎関節症、事故・転倒などによる外傷、顎変形症等多く見られた疾患に20~30歳代の患者が多く該当したためと考えられた。50歳代の患者を挟んで40~60歳代の患者が多い理由としては、基礎疾患有病者が多いこと、歯周疾患や嚢胞性疾患、腫瘍性疾患等の好発年齢であること、これに合併して発症した炎症性疾患によるものであると考えられる。

新患患者を居住地別にみると、当院の位置する長野市が全体の68.0%と圧倒的に多い結果ではあったが、長野市に隣接する地域以外の遠隔地からの受診患者も多く、当科が長野市近郊はもとよりかなり広域に口腔外科施設として認められていることがうかがえる。

紹介患者数については、院外紹介患者は25694名(紹介率39.9%)、院内紹介患者は8077名(紹介率12.5%)、院内外紹介患者の合計は33771名であり、その紹介率は52.4%であった。他施設の報告^{1, 2, 6-10)}をみると、対象期間に差もあり、各医療機関の詳細も不明であるが、最低18%⁸⁾~最大59%⁶⁾でありおよそ30%~40%^{1, 2, 7, 9)}台の医療機関が多く見られたが、それらの年間の院外紹介患者数はおよそ200~800名程度であり、当科においては2001年からの最近2年間の院外紹介患者数は年平均1742名で紹介率も46.9%と非常に高いものと推察される。また、院外紹介患者の約87%が歯科開業医(矯正歯科を含む)からであり、当科が地域歯科開業医と密接な連携を持ちながら役割分担がうまく行われていることが推察される。

天野ら¹¹⁾は病診連携システム導入により受診患者数の増加、紹介患者数の増加等を指摘し病診連携システム導入の有用性を示唆している。当院では病診連携を踏まえ、1999年4月より病診連携室(2003年4月より地域医療推進課に名称変更)と専属職員2名(現在3名)を設置し病院全体として近隣医療機関等に対する啓蒙活動などに

より紹介率の向上をつとめ、登録医制度の導入も行い2003年8月には「地域医療支援病院」に承認された。

疾患別にみると、いわゆる一般歯科疾患はわずか4.6%のみで、当科の口腔外科専門医療機関としての地域医療に占める重要性を示していると考えられる。疾患の内容は、智歯周囲炎、顎骨炎、歯周炎などの炎症性疾患が最も多かったが、疾患の種類は非常に多岐にわたっていた。

発育異常・奇形・変形では、埋伏智歯が年平均179例、智歯周囲炎を含めると年平均715例となる。当科の1994年の報告¹²⁾では外来における埋伏智歯の抜歯は805件、萌出智歯の抜歯は255件であわせて1000件を超えており、長野市および近隣地域の歯科開業医においては智歯の抜歯は当科へ依頼するケースが多いと思われる。顎変形症は、当科開設時、長野市内の矯正歯科専門開業医は2件のみであったが現在4件と増加したこともあり、最近では年間20~30件の外科的矯正術を施行している。唇顎口蓋裂・口蓋裂は、開設時より初回手術を当院形成外科が担当することとなっているため症例数は少ないが、近年顎裂部の骨移植は当科で担当しており最近増加している。

外傷については、当科の開設した1983年10月から1991年までは次第に増加したが、その後は年間220例前後でその症例数に大きな変化はなかった。顎骨骨折の比率は1989年からの4年間で24.6%¹³⁾であったが、1997年からの2年間は15%¹⁴⁾と明らかな減少傾向にあった。

顎骨嚢胞については、術後性上顎嚢胞が年平均25例と多いのが特徴であるが、1991年から1993年の3年間の統計¹⁵⁾では年平均29例で、以降2000年までは年間20例以上であったが2001、2002年の最近2年間は年平均15例と減少傾向にあった。

悪性腫瘍は年平均19例で、各年度により症例数にばらつきはあるものの、多くは歯科開業医、病院歯科・口腔外科からの紹介であるが、耳鼻咽喉科、外科等の他診療科からの紹介も多く、北信地域の口腔悪性腫瘍の治療機関として評価されている結果といえる。

顎関節症は1991年より年間400例を超え、1996年は600例となり以降も400例以上と比率の高い疾患である。以前、整形外科や耳鼻咽喉科を受診するケースも多かったと思われるが、1991年頃より患者数も急激に増加しており口腔外科的疾患であるとの認識が一般化されてきたためと考えられる。

その他に分類される疾患の中では、1996年よりインプラント治療、2001年より睡眠時無呼吸症候群の簡易検査・口腔内装置による治療、2002年より摂食嚥下障害の機能診断・指導を開始したことにより、今後これらの症例についてはさらに増加するものと考えられる。

以上、今回の結果より、当科が開設時より口腔外科専

門医療機関として地域医療に果たしてきた役割は大きいものと考えられるが、今後も他医療機関と協力体制を更に強化し、質の高い口腔外科医療の提供に努めていきたいと考えている。

結 語

今回、私たちは長野赤十字病院口腔外科の開設した1983年10月から2003年9月までの20年間に当科外来を受診した新患患者64421名について臨床統計的観察を行った。その結果、年間を通しほぼ安定した新患患者数に加えて、現在まで高い紹介率を維持しており、周辺地域医療機関との病診連携が十分に図られているものと考えられた。また、疾患内容からも当科が北信地域の口腔外科専門医療機関としての機能を十分果たしているといえる結果であった。

文 献

- 1) 阿部哲也, 飯田昭彦, 高木律男, 星名秀行, 小野和弘, 鍛冶昌孝, 今井信行, 服部幸男, 安島久雄, 大橋 靖: 最近14年間ににおける外来患者の臨床統計的観察. 新潟歯学会雑誌, 28(2)9 - 17, 1998.
- 2) 佐藤千晴, 北川栄二, 村西京一郎, 林 成憲, 深沢 亨, 野谷健一, 福田 博: 医療法人社団北斗病院歯科口腔外科開設後2年6ヶ月における口腔外科疾患患者の臨床統計的検討. 北海道歯誌, 19: 220 - 226, 1998.
- 3) 筑丸 寛, 上村真咲子, 小泉 文, 斎藤亜希子, 村田千年, 来生 知, 平田雅嗣, 渡貫 圭, 堅田裕, 佐藤直之, 斎藤友克, 小林園生, 宮崎千佳, 武川寛樹, 堀本 進, 水木信之, 青木伸二郎, 川辺良一, 大村 進, 藤田浄秀: 横浜市立大学医学部附属病院における1997年の口腔外科外来および入院患者の統計的観察. 横浜顎口外誌, 11(1, 2): 21 - 29, 1998.
- 4) 大儀和彦, 山中康嗣, 関東里衣, 今井裕一郎, 河野太郎, 岸 宗弘, 黒瀬尚利, 植村和嘉, 桐田忠昭: 高井病院歯科口腔外科開設後5年間ににおける新患患者の臨床的観察. Journal of Nara Medical Association, 54(2)103 - 112, 2003.
- 5) 池嶋一兆, 釜田 朗, 清野晃孝, 斎藤高弘, 天野

義和: 奥羽大学歯学部附属病院一般歯科受診紹介新患の臨床統計的観察. 日本歯科医療管理学会雑誌, 38(4)335 - 341, 2004.

- 6) 赤澤 登, 久我雅則, 横尾 聡, 高橋伸彰, 島田圭吉: 兵庫県立成人病センター口腔外科開設後2年間の患者の臨床統計的考察(抄). 日口外誌, 36: 1981, 1990.
- 7) 江口克巳, 枡原義之, 松井俊明, 上田倫弘, 中島頼俊, 山下徹郎: 恵佑会札幌病院歯科口腔外科開設以来7年間の外来患者の臨床統計的検討. 北海道歯誌, 18: 42 - 48, 1997.
- 8) 服部 徹, 北島 正, 内藤講一: 市立島田市民病院における初診患者動態(抄). 日口外誌, 34: 2944, 1998.
- 9) 富田汪助, 島田紀夫, 岸本一夫: 国立栃木病院歯科口腔外科の最近3年6ヶ月間の患者の臨床統計的観察(抄). 日口外誌, 30: 2183, 1984.
- 10) 三浦尚徳, 畔田 貢, 大類 晋, 江端正祐: 日鋼記念病院歯科口腔外科における最近5年間の外来患者の臨床統計的検討. 北海道歯誌, 16: 142-148, 1995
- 11) 天野光専, 嘉悦淳男, 町田純一郎, 西岡元嗣, 山本 忠, 角田典隆, 加納欣徳, 中野哲吉: 病診連携システム導入前後の豊橋市民病院口腔外科外来患者の受診動態変化. 愛知学院大学歯学会誌, 38(1)195-200, 2000.
- 12) 横林敏夫, 清水 武, 小林 豊, 岡沢恵子, 長澤斉, 堀内隆雄: 長野赤十字病院口腔外科における平成6年1年間の手術症例の臨床統計的検討. 新潟歯学会雑誌, 25(2)195-200, 1995.
- 13) 峯村伸児, 横林敏夫, 山本雅也, 藤本勝彦, 中村なが子, 堀 和則, 橋本容子: 当科における顎顔面口腔外傷患者の臨床統計的観察. 日口外誌, 35: 3038 - 3039, 1989.
- 14) 北川原香, 横林敏夫, 清水 武, 五島秀樹, 鈴木理絵, 田尻朗子: 最近2年間の顎顔面口腔外傷患者の臨床統計的観察. 長野赤十字病院医誌, 13: 18-22, 1999.
- 15) 松田拓巳, 横林敏夫, 清水 武, 岡沢恵子, 小林豊, 長澤 斉: 最近3年間の術後性上顎嚢胞の臨床統計的検討. 新潟歯学会雑誌, 24(2)43-48, 1994.